

平成31年4月17日

千葉県農林総合研究センター長

I 向こう1か月の予報

発生量及び発生時期は平年との比較で表す。予想発生量は「多」「やや多」「並」「やや少」「少」で表している。また、予報の根拠の(+)は多発要因、(-)は少発要因であることを示している。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イ ネ	イネミズゾウムシ	少 予想発生時期 並	2月越冬量：少(-) 3月1日以降の有効積算温度 ：並 気象予報：気温並	<ul style="list-style-type: none"> 常発地や昨年多発したほ場では、苗箱処理剤による防除を実施する。 移植10日後ごろの飛来成虫数が2～3株に1頭以上の時は、成虫を対象に防除を実施する。
	ヒメトビウンカ	多	2月越冬量：多(+)	<ul style="list-style-type: none"> イネ縞葉枯病を媒介する。 昨年、栽培期間中や再生株で縞葉枯病が多発したほ場では、苗箱処理剤によるヒメトビウンカの防除を実施する。
	イネクロカメムシ	やや少	前年7月の発生量 ：やや少(-) 2月越冬量：やや少(-)	<ul style="list-style-type: none"> 越冬成虫の飛来は6月上旬ごろのため、苗箱処理剤での防除では6月まで効果の持続する薬剤を選択する。 6月中旬ごろ発生を観察し、多発の場合は本田防除を行う。
	イネドロオイムシ	並	前年の発生量：並	<ul style="list-style-type: none"> 常発地や昨年多発したほ場では、苗箱処理剤による防除を実施する。 侵入最盛期(5月中旬ごろ)の飛来成虫数が10株に2頭以上の時は、防除を実施する。
	スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	多	前年6月の発生量：並 前年6月の被害株率：多(+) 12月～2月の平均気温 ：やや高(+)	<ul style="list-style-type: none"> 水田取水口に目合い5～10mmの網袋を設置し、侵入を防止する。 移植後3週間は水深4cm以下の浅水にし、被害が目立つときは薬剤防除する。 P4「これから注意を要する病害虫」を参考にする。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
冬 春 ト マト	うどんこ病	並	4月上旬発生量：並 気象予報：日照時間並	・ 被害茎葉は、施設外に持ち出し、適切に処分する。
	灰色かび病	並	4月上旬発生量 ：並 気象予報：降水量並 日照時間並	・ 施設内の換気を良くし、湿度を下げる。 ・ 被害果や被害茎葉は施設外に持ち出し、適切に処分する。
	アブラムシ類	並	4月上旬発生量：並 3月黄色粘着板誘殺数 ：並 気象予報：気温並 日照時間並	・ 同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。
	コナジラミ類	並	4月上旬発生量 オンシツコナジラミ：並 タバココナジラミ ：やや多（+） 3月黄色粘着板誘殺数 ：並 気象予報：気温並 日照時間並	・ 施設内外の雑草を除去する。 ・ 栽培終了時には抜根した状態でハウスを密閉し、完全に枯死させて本虫を死滅させる。
スイカ	つる枯病	並	4月上旬発生量：並[発生なし] 気象予報：気温並 降水量並	・ ほ場の排水をよくする。 ・ 多湿を防ぐため、トンネルの換気を適切に行う。
	アブラムシ類	並	4月上旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	・ ほ場周辺の雑草を除去する。 ・ 薬剤の散布は葉裏までていねいに行う。
	ハダニ類	並	4月上旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	・ 繁殖が早く、短期間で高密度となるため、適期を逃さずに防除する。
ナシ	黒星病	並	越冬菌密度 秋型病斑発病葉率： やや少（-） 罹病芽率：並 気象予報：降水量並	・ 罹病芽基部の除去は極めて重要なので、必ず実施する。
温州 ミカン	そうか病	並	3月下旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	・ 新梢の長さ1cmくらいが防除適期である。
	ミカンハダニ	やや多	3月下旬発生量：やや多（+） 気象予報：気温並 降水量並	・ 冬期防除を見合わせていた園地では4～5月に防除を行う。 ・ マシン油乳剤（97%）は使用時期で希釈倍率が変わるので注意する。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
カーネーション	ハダニ類	並	3月下旬発生量：並 気象予報：気温並 日照時間並	<ul style="list-style-type: none"> 早期発見に努め、発生初期から薬剤防除する。 同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
	アザミウマ類	並	3月下旬発生量：並 3月黄色粘着板誘殺数：並 気象予報：気温並 日照時間並	<ul style="list-style-type: none"> 施設内外の雑草や花がらは適切に処分し、ほ場周辺に放置しない。 同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。

II これから注意を要する病害虫

スクミリンゴガイ

スクミリンゴガイ（以降「貝」と言う）の発生予報について、昨年6月の巡回調査では、発生量は平年並であったが、被害株率は多であり、活動が旺盛であったと推測できること。また、昨年12月から今年2月まで冬季の平均気温はやや高であり、越冬率も高めと推測できること。以上のことから今後1か月間の発生量は多いと予想される。発生地において、イネへの食害が集中する移植時からイネ4葉期までの間は、十分な防除対策を実施する。

<防除法>

1 ほ場準備時

- ・貝の未発生地で作業を行う場合は、貝を生息地から持ち込まないように、作業を先に行うか作業機械の清掃を徹底する。
- ・深水では貝が活発に動くため、田面を均平にし、窪地をつくらない。
- ・畦畔を高めにし、水路や隣接地から貝が畦畔を乗り越え侵入することを防止する。
- ・取水口に目合い5～10mmの網袋を設置し、貝の侵入を防止し捕殺する。

2 移植時からイネ4葉期（移植から約3週間）まで

- ・耕種的防除が基本であり、水深4cm以下の浅水管理を行い、貝の活動を制限する。
- ・貝密度が高い、水深が深い場所がある等、耕種的防除の効果が低いと予想される場合は、下表を参考に薬剤防除する。

3 イネ4葉期以降

- ・イネ4葉期以降はイネへの食害がほとんど無くなるが、貝の増殖を防ぐため、卵塊を水中に落とし窒息死させる。なお、水中への払い落としが有効なのは産卵後、6月は7日以内、7～8月は5日以内、その他の時期は10日以内であり、以降は卵塊を捕殺する。

表 主な薬剤

（注意事項：止水期間は1週間程度とする）

薬剤名	有効成分	作用機構	使用基準	使用量	備考※
【苗箱施用】 パダン粒剤4	カルタップ [®]	IRAC 14	播種前又は移植当日 / 1回以内	60～100g /箱	食害防止
【本田防除】 パダン粒剤4	カルタップ	IRAC 14	収穫30日前まで / 6回以内	4kg /10a	食害防止
スクミハンター	ネオシラム	IRAC 14	収穫45日前まで / 3回以内	1～2kg /10a	食害防止
キタジンP粒剤	IBP	FRAC 6(F2)	本田初期 / 2回以内	3～5kg /10a	殺貝効果
スクミノン	メタルデヒト [®]	IRAC 8(他)	収穫60日前まで / 2回以内	1～4kg /10a	食毒による殺貝効果
スクミンベイト3	燐酸第二鉄	IRAC un	発生時 /—	2～4kg /10a	食毒による殺貝効果及び食害防止

※ 食害防止の効果を持つ薬剤の使用後に、食毒の効果を持つ薬剤を使用すると効果が発揮されない。

Ⅲ その他の情報

平成 30 年度農作物の主要病害虫の発生状況について

○気象概況

平成 30 年度は、4 月から平均気温が平年より高く推移した。梅雨入りは 6 月 6 日頃と平年並で、梅雨明けは 6 月 29 日頃で平年よりかなり早かった。夏（6～8 月）の気候は、高気圧に覆われ晴れの日が多かったことから、平均気温、日照時間は平年よりかなり高く（多く）なり、降水量は並または少なくなった。この期間の観測値は観測を開始して以降、館山と勝浦で平均気温が 1 位、千葉と銚子では 2 位となった。日照時間についても千葉と館山が 2 位となった。7 月、8 月には台風 12 号、13 号の影響があった。

9 月は、前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多くなり、激しい雨や雷雨となった日もあった。そのため平均気温は平年並となったが、降水量は多く、日照時間は少なくなった。特に、30 日から翌 10 月 1 日にかけて関東地方に接近した台風 24 号の影響で、猛烈な雨や雷雨となったところもあり、いくつかの地点で風速、最大瞬間風速に関する極値を更新した。10 月に入ると気温は再び高い傾向となり、この傾向は 3 月まで続いた。降水量は少ない状態となり、この傾向は 1 月まで続いた。2 月は平年並となり、3 月は多くなった。日照時間は、12 月は少なく 1 月は多くなったものの、2 月以降は再び少なくなった。

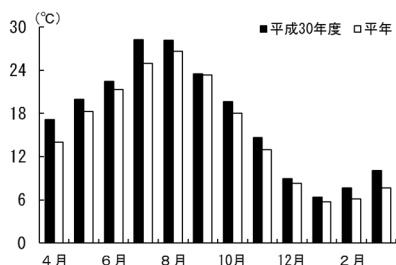


図 1 平均気温（千葉市）

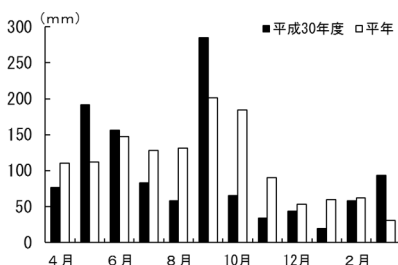


図 2 降水量（千葉市）

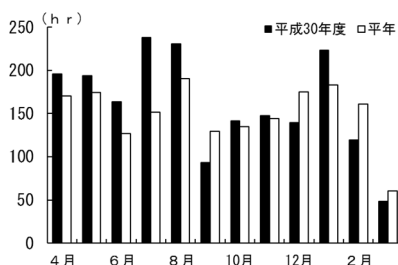


図 3 日照時間（千葉市）

○病害虫発生状況

1 イネ

① いもち病

6～7 月の感染好適日がやや多かった。葉いもちの発生は多かったが、気温が高かったことにより、穂いもちの発生は抑えられ、やや少ない発生となった。

② 縞葉枯病

7 月下旬の調査で千葉・東葛飾地域で発生が確認された。発病株率は昨年並であった。

収穫後の再生株での発病株率は、昨年に比べ減少した（図 4）。

③ ごま葉枯病

7 月下旬の調査で県北東部の砂壤土地域を中心に発生がみられ、やや多い発生となった。なお、前年は多発生（平成 19 年からの比較で 1 位）であった。

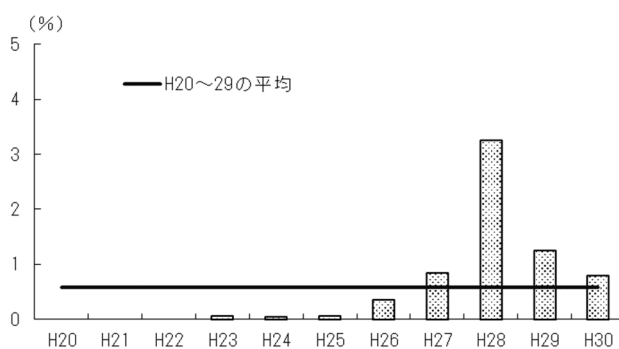


図 4 水稲再生株調査におけるイネ縞葉枯病の年次別発病株率

④ 斑点米カメムシ類

7月上旬の雑草地すくいとり調査、7月下旬及び収穫期の本田すくいとり調査では、クモヘリカメムシ等の大型斑点米カメムシは、平年並の発生であったが、カスミカメムシ類については、7月下旬に発生が多かった。

玄米着色粒（斑点米・黒点米・その他着色粒）の発生状況は平年並であった（図5）。

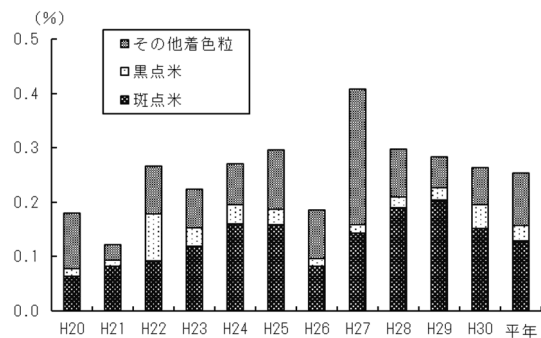


図5 着色粒（斑点米・黒点米・その他着色粒）の発生状況

⑤ スクミリンゴガイ

県東部の九十九里沿岸を中心に欠株による被害が発生したが、発生量は平年並であった。

⑥ ウンカ類・ツマグロヨコバイ

平成30年2月の調査では、ヒメトビウンカ及びツマグロヨコバイの越冬量は並であった。本田においては、ヒメトビウンカはやや多いまたは多い発生であった。ツマグロヨコバイは7月調査までは平年並であったが、収穫期調査では多い発生となった。なお、平成31年2月の調査では、ヒメトビウンカとツマグロヨコバイの越冬量が多くなった。

⑦ イネミズゾウムシ

発生量は平年並であった。

⑧ イネドロオイムシ

5月上旬はやや多い発生であったが、6月上旬はやや少なくなり発生は終息した。

イネクロカメムシ

全般的にやや少ない発生であった。

2 普通畑作物

(1) サツマイモ

食葉性害虫の寄生や被害は、7月にやや少なかったものの並から多い発生となった。

(2) ラッカセイ

7月以降に白絹病がやや多い発生となった。9月上旬の調査で、ヒョウタンゾウムシ類、コガネムシ類、チョウ目による被害株率が、過去10年と比較して最も高くなった。

3 野菜

(1) 夏秋トマト

全体としては、病害、虫害ともほぼ平年並であった。ただし、アザミウマ類については9月にやや多い発生となった。また、黄化葉巻病は一部の地域で発生が確認され、多発地点では発病株率は20%を超えた。

(2) スイカ

平年に比べ、アブラムシ類の発生が早かった。5月下旬の調査では、つる枯病とうどんこ病の発生がやや多くなった。

(3) 秋冬ネギ

調査期間をとおしてネギアザミウマの発生が多かった。8月には白絹病の発生もみられ、秋期にはべと病の発生も多くなった。

(4) サトイモ

5月下旬の調査開始からアブラムシ類、ハダニ類の発生が多かった。8月に減少したものの9月には再び多い発生となった。ハスモンヨトウは7月まで発生が認められなかったが、8月以降は多い発生となった。

9月には、汚斑病が多く発生した。また、モザイク病の発病も多かった。近年、増加しているサトイモ疫病は、本年も概ね8月以降に発生が確認された。

(5) 冬春トマト

コナジラミ類は、オンシツコナジラミの発生は平年並、タバココナジラミの発生はやや多い発生となった。灰色かび病は並からやや多い発生で、黄化葉巻病は平年並の発生となった。

(6) 冬レタス

生育期間をとおして病害虫の発生はあまりみられず、平年並であった。

(7) 冬キャベツ、春キャベツ

冬キャベツは、11月以降、コナガの寄生はやや多い、または多い発生で推移した。また、黒腐病の発生は多かった。

春キャベツについても、年明け以降コナガの寄生はやや多い、または多く発生している。

(8) イチゴ

昨年度多発したハダニ類は、並またはやや多い発生であった。しかし、被害が大きくなったほ場では、発生が減らなかった。

(9) チョウ目害虫（フェロモントラップ）

①ハスモンヨトウの誘殺数は、9～10月に多くなった（図6）。

②オオタバコガの誘殺数は8月に多かったが、概ね平年並となった（図7）。

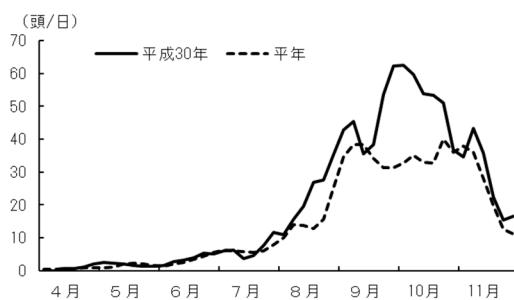


図6 フェロモントラップによるハスモンヨトウの発生消長

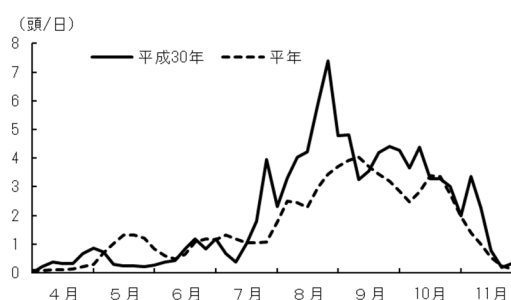


図7 フェロモントラップによるオオタバコガの発生消長

③タバコガの誘殺数は平年を下回って推移した（図8）。

④コナガの誘殺数は平年並で推移したが、11月以降平年より多く推移した（図9）。

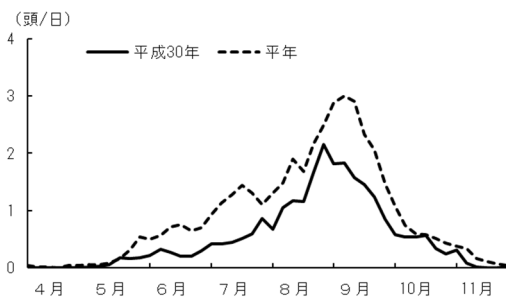


図8 フェロモントラップによるタバコガの発生消長

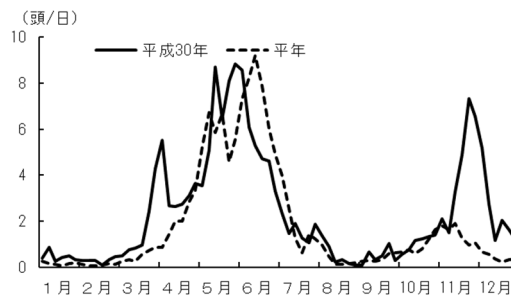


図9 フェロモントラップによるコナガの発生消長

4 果樹

(1) ナシ

① 黒星病

葉、果実とも発生は少なかった（図10、図11）。

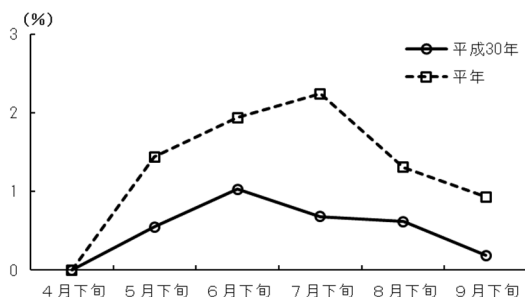


図10 黒星病発病葉率

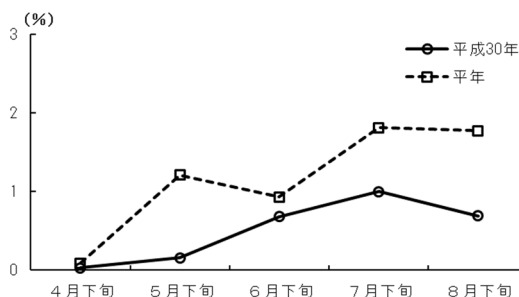


図11 黒星病発病果率

② シンクイムシ類・ハマキムシ類

ハマキムシ類は、平年並の発生が見られた。シンクイムシ類も同様であった（図12）。

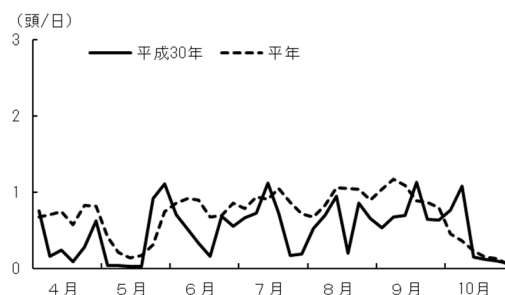


図12 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの発生消長

③ ハダニ類

平年並の発生であった。

④ ニセナシサビダニ

従来型の症状は平年より少ない発生であった。また、モザイク症状については、前年より少ない発生であった。

(2) カンキツ

そうか病は、9月にやや多い発生であった。かいよう病は4月にやや多い発生となったが、概ね平年並の発生であった。黒点病は平年並の発生となった。ミカンハダニは少ないからやや少ない発生、ミカンハモグリガは5月にやや多い発生であったが、その後はやや少ない発生か、平年並の発生であった。

(3) ビワ

灰斑病、アブラムシ類の発生は平年並であり、カミキリムシ類はやや少ない発生であった。

(4) 果樹共通：果樹カメムシ類

フェロモントラップ調査結果では、6月までは平年並であったが、7～8月にかけて平年を下回る誘殺数となった（図13）。ナシ、カンキツの果実被害は平年並で、予察灯調査の結果は、夏季の誘殺数が多かった。

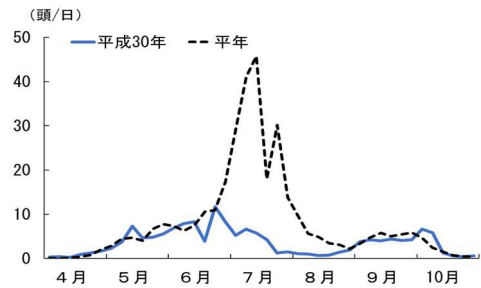


図13 フェロモントラップによるチャバネアオカメムシの発生

5 花き類

(1) カーネーション

目立った病害虫の発生はなく、平年並であった。

(2) ストック

施設、露地とも病害は、平年並。ハイマダラノメイガの発生は無かった。コナガは露地、施設とも並から多い発生で、被害が目立った。アブラムシ類は、平年並の発生であった。

○ 警報・注意報・特殊報・発生情報の発表状況

1 病害虫発生予察警報

発表無し

2 病害虫発生予察注意報

発表無し

3 病害虫発生予察特殊報

第1号 トルコギキョウ斑点病の発生について 平成30年10月5日

<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/boujo/documents/2018/20181005tokusyuhou01.pdf>

4 病害虫発生情報

第1号 LiNSV（仮称）による「トルコギキョウえそ萎縮病」の発生について

平成30年8月9日

https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/documents/20180809hassei_jouhou01.pdf

第2号 コナガの発生について 平成31年2月21日

https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/documents/20190221hassei_jouhou02.pdf

参考資料

○主要病害虫の発生状況

巡回調査結果（水稲：2月中旬，野菜：4月上旬，果樹・花き：3月下旬）

作物名 (調査地域)	病害虫名	調査項目	調査結果			備考
			本年値	平年値	前年値	
イネ (県内全域)	イネミズゾウムシ	畦畔0.25㎡越冬成虫数	0.09	2.06	2.28	
	イネゾウムシ	畦畔0.25㎡越冬成虫数	0.20	0.30	0.19	
	イネクロカメムシ	畦畔0.25㎡越冬成虫数	0.04	0.12	0.01	
	ヒメトビウンカ	畦畔3㎡吸い取り成幼虫数	4.60	1.57	1.14	
	ツマグロヨコバイ	畦畔3㎡吸い取り成幼虫数	4.24	1.83	0.39	
冬春トマト (海匠, 長生, 君津)	うどんこ病	発病株率 (%)	2.53	3.44	9.60	
	灰色かび病	発病株率 (%)	14.00	16.00	26.40	
		発病果率 (%)	0.38	0.72	1.29	
		果実発病度	1.77	3.94	6.00	
	葉かび病	発病株率 (%)	0.00	4.77	0.27	
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.12	0.00	
	オンシツコナジラミ	成虫寄生株率 (%)	0.00	3.10	6.93	
	タバココナジラミ	成虫寄生株率 (%)	0.33	0.59	0.27	
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.00	0.00	
ハモグリバエ類	幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.21	0.80		
アザミウマ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.00	0.00		
春キャベツ (海匠)	菌核病	発病株率 (%)	2.40	0.78	0.00	
	黒腐病	発病度 (%)	0.00	0.00	0.00	
	灰色かび病	発病株率 (%)	1.60	0.08	0.00	
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	0.19	0.00	
	コナガ	25株当たり寄生幼虫蛹数	0.80	0.08	0.33	
スイカ (印旛, 山武)	つる枯病	発病葉率 (%)	0.00	0.00	0.00	
	アブラムシ類	成幼虫寄生葉率 (%)	0.00	0.14	0.00	
	ハダニ類	雌成虫寄生葉率 (%)	0.00	0.04	0.20	
	ウリハムシ	寄生成虫数	0.00	0.00	0.00	
ナシ (県内全域)	黒星病	秋型病斑発病葉率 (%) 注1	0.97	3.75	1.53	
		罹病芽率 (%) 注2	0.65	1.93	2.85	
温州ミカン (安房)	そうか病	発病度	0.00	0.04	0.00	
	かいよう病	発病度	0.00	0.01	0.00	
	ミカンハダニ	雌成虫寄生葉率 (%)	11.40	3.64	0.80	
	クワゴマダラヒトリ	被害葉率 (%)	0.00	0.02	0.00	
ビワ (安房)	灰斑病	発病葉率 (%)	7.00	4.25	1.75	
	アブラムシ類	成幼虫寄生葉率 (%)	0.00	0.05	0.00	
	カミキリムシ類	被害穴数	0.00	0.05	0.00	
カーネーション (安房)	萎凋病	発病株率 (%)	0.00	1.50	1.60	
	立枯病	発病株率 (%)	0.80	0.78	0.80	
	アザミウマ類	成幼虫寄生株率 (%)	0.00	1.30	4.80	
		被害株率 (%)	5.60	11.34	44.80	
		黄色粘着板誘殺数	3.40	4.63	15.40	
	ハダニ類	雌成虫寄生株率 (%)	2.40	2.98	3.20	

注1 10月中旬調査 注2 2月調査

トラップ月間誘殺数 (3月)

種類	病害虫名	トラップ設置場所	誘殺数 (頭)			備考
			本年値	平年値	前年値	
性フェロモン	コナガ	海匠, 安房	21.7	26.3	53.1	

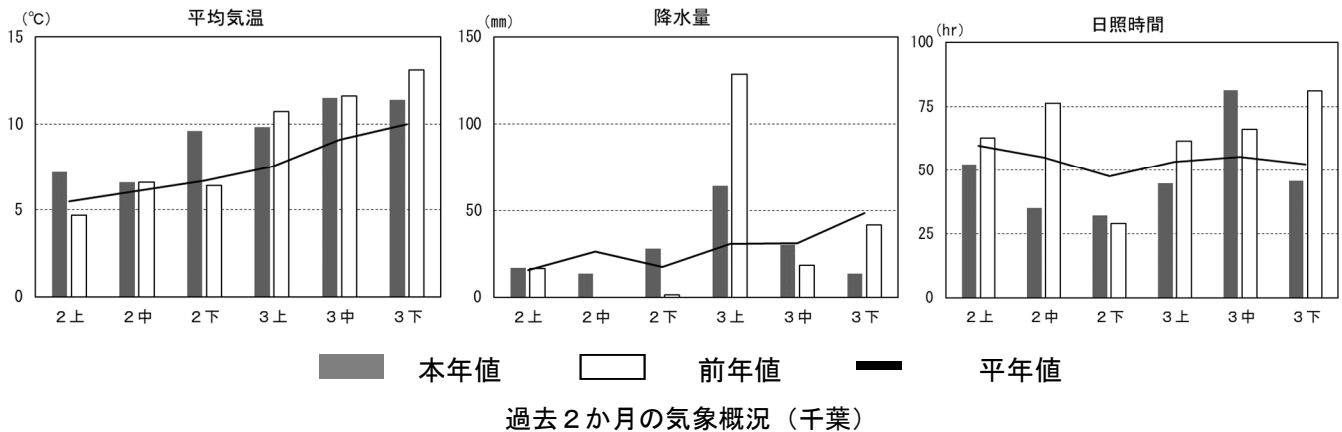
○気象予報

4月11日気象庁地球環境・海洋部発表
関東甲信地方における向こう1か月間の確率(%)

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

向こう1か月間の各気象要素の平年値
(4月17日～5月16日銚子地方気象台資料)

要素	千葉	銚子	館山
気温(°C)	16.5	15.4	16.5
降水量(mm)	102.3	123.7	142.2
日照時間(hr)	171.4	174.9	173.0



農薬は適正に使用しましょう。無登録農薬の使用はできません。

- 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍数、収穫前日数、総使用回数などが定められています。
- 登録番号のない薬剤は、農薬として使用できません。登録農薬には必ず登録番号が記載されています(記載例 農林水産省登録第〇〇〇号)。
- 農薬はラベルをよく読んで適正に使用しましょう。
- 飛散しないよう工夫して散布しましょう。
- 農薬を使用したら必ず記帳するようにしましょう。
- タンクやホースは洗いもれがないようきれいに洗っておきましょう。

・病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>

・次回の発行予定は5月17日です。なお、注意報等の臨時情報は逐次発行されます。

・薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。

https://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

問い合わせ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0006 千葉市緑区大膳野町 804

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp